
捕食学校 School for preying

更田 空蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捕食学校 School for preying

【Nコード】

N3587V

【作者名】

更田 空蔵

【あらすじ】

生徒たちが恋に青春に汗を流すはずの学び舎が、異形の怪物のために用意された餌場に姿を変える。何の疑問も抱かずに支配され、捕食される友達の姿を見て、彼らが胸に抱いた想いは……。

<勇敢な馬鹿>とく賢い臆病者>が紡ぐ物語。

捕食学校（前書き）

残酷な、または暴力的な表現を、物語の進行上止む無く、多く含むことがあると思います。

大げさかもしれませんが、そういった描写が苦手な方は御覧にならないことをおすすめします。

捕食学校

誰かの悪戯で、学校長の胸像が壊される事件。

意外性はあるが、人の噂も七十五日。やがて誰もが気に留めなくなるような些細なことだ。

しかし、これをきっかけに、生徒たちの学び舎は異形の怪物のために用意された餌場へと

姿を変えてしまう。変化に気がついた僅かの生徒が目当りにしたのは、学皇帝長がっこうていぢやうを自称す

る怪物に支配され、捕食されることに対する疑問を次第に失う友人たちの姿だった。

至極懸命な判断ができる者は、自宅へ避難をした。

だが、大切な友人を守るために戦う大馬鹿たちがいた。勇敢な大馬鹿たちの、反乱という名の長い戦いが始まる。

捕食学校（後書き）

今作こそ、しっかりと構想を練って完結させたいと思います。

前作を応援してくださった方には、謝罪してもしきれないことをしてしまい、このようなことを言える立場ではないことは重々承知ですが、気が向きましたら是非応援していただければと思います。

作者の更田空蔵

古佐二 春（前書き）

なぜか、もう前日談です。
はい。

古佐二 春

世界の約30億人の女性の皆さんへ

初めまして。俺の名前は古佐二 春^{こさじ はる}。自宅から徒歩5分の高校に通う一学生^{リンセス}…いや、それは世間を欺く仮面だ。俺は、30億人のPrinces^{プリンセス}達を命懸けで愛し尽くす王子様さ。え、なぜ英語で統一せずに王子様かって？

細かいことを気にすると、長生きできないぜ？

……と、まあ。

無駄の多い自己紹介なんだが。

え？残酷描写の多い小説の最初に、軽いノリで主人公が喋ってる？残念。

中々素敵な誤解だが、俺はこんなに個性的なのに主人公じゃあないんだ。今回は俺の視点で、俺の大事な仲間達を紹介することが仕事でね。

「お前、何一人で呟いてるんだよ。こんな変人と友達扱いされたらよお……。本当に困るぜ、しかし。」

早速話しかけてきた不良生徒風の男の名前は梶鳥^{かじとり} 英^{えい}。＜困るぜ、しかし。＞が口癖の、俺の親友だ。

「おいおい、さっき女子に不良呼ばわりされたからって、俺に当たるなよ、英ちゃん。」

「うっさいわ、俺がそんなこと気にするタマかよ……。」

このように強がっている俺の親友だが、付き合いの長い俺の目は誤

魔化せない。

梶鳥 英。彼は以前、クラスの女子生徒に、イマドキ<恋文>を渡して愛の告白をした賞賛すべき勇者なんだが、その女子生徒は恐怖のあまり、大きな瞳に涙を浮かべて、「不良」と叫びながらその場から逃げたんだ。

それ以来、俺の親友は不良呼ばわりされることを極端に嫌って、もし俺のようなナイスガイが口を滑らせれば激怒して、以前のように女子生徒なら三日は寝込む勢いで落ち込むんだ。

それでも喧嘩なら校内最強の彼はこう名乗る。

「俺は不良なんて悪者じゃあないぜ…。俺は泣く子も笑うく喧嘩マン>だ。」

こんな感じで、馬鹿みたいで笑える男だが、実は彼が頼れる主人公なのだ。

だけど、この物語には欠かせない主人公がもう一人いる。

ここは「この俺さ。」と言いたい所なんだが……。

「よ、今日も冴えないね。彼女できた？」

「一生言ってるよ……。」

俺のジョークを冷たく切り返すコイツがそう。我らが頼れる（？）もう一人の主人公。名前は八神^{やがみ} 慎^{しんいち}一だ。彼の妹の話なら、校内でも有名なアイドル的存在だから話が膨らむんだけど……。彼については特になし。

「仮にも主人公の紹介がそれだけなのかよ……。」「
平然と俺の心の声にカットインしてきた彼は、旭^{あさひ} 明良^{あきひ}。

全国模試でトップの成績を有する秀才で、ちよつと理屈っぽいやつだが、ありとあらゆるジャンルのおたくだつて噂だから好感が持てるやつだ。どこか謎めいた雰囲気があると、勝手に俺は思っているんだが……。まあ、俺がつるんでいるのはこの三人ぐらいかな。

「旭は聞いた？校長の胸像が壊されたつて話。」

「まあ、人伝にね。」

旭の表情に暗い影が見えた気がするけど、気のせいだろう。

「人の噂も七十五日つて言うから、すぐに忘れ去られる話なんだろうね。」

— — —

この時の俺は、まさかこんな些細な事がきっかけで、日常つていう言葉がエスケープするなんて思いもしなかった。

古佐二 春（後書き）

思っていたより長くなりました。
すみません m (| |) m

パフォーマンス殺人（前書き）

三話と四話、前編後編だと思ってください。
三話の切りが悪い言い訳じゃありません、はい。

パフォーマンス殺人

――異変は突然起きる――

――その朝は血生臭い空気と、恐怖が漂っていた――

梶鳥英と、取り巻き（扱い）の古佐二、旭達が現れたことを察し、胸像があつた場所を取り囲んでいた生徒達が、次々と通り道を空けていく。「とんだ嫌われ者だ。」と悪態をついていた梶鳥も、視界に入った惨状を目の当りにし、言葉を無くした。いつも陽気な古佐二ですら顔が青ざめている。

「ただ殺されているわけじゃあない、これは、まるで……。」

彼らの近くで一人の生徒が呟いた言葉を旭は聞き逃さなかった。

「<まるで>何だ？」

「……！？」

口に出して言っていることに気がついていなかったのか、その生徒は不意を衝かれたように一歩後ろに退いた。

「お前は……。」

梶鳥や古佐二だけでなく周囲の人間全てが注目したことを察して、その生徒は少し苛立ち気味に眼鏡をかけ直す。

「何かわかるのか、川森」

戸惑いながら、周囲に立っていた他の生徒が尋ねる。

「パフォーマンスだよ、これは。」

「どういうことだ？」

胸像のあった場所で朽ちたくそれゝを観察しつつ、川森は一同に話し始める。

「これを実行した人物は未だ目的を遂げていない。それどころか、そいつはく自分が殺したゝ相手に、殺意どころか何の感情も抱いていない。誰でも良かったに違いない。当然ここにいる誰かでも……だ。」

川森が言った最後の言葉に、その場の殆どの者の顔が真つ青になる。

「じゃあ、これをしでかした奴の目的は何だ？」

梶鳥が尋ねる。それに対して、川森は不謹慎にもにやけ面を浮かべて見せた。

「正確にはわかんないさ。一つ分かっているのは、くこれゝを俺達に見せることに大きな意味がある。」

「何の根拠もない憶測だな。小説……いや、漫画やアニメの見過ぎなんじゃないのか？」

旭がそう切り返したのを聞いて、生徒達がどよめき出す。互いに博識で秀才の旭と川森が、犬猿の仲であることは周知の事実なのだが、川森は激情することなく、あまりにも余裕のある様子だったので、彼らの口論を日常茶飯事見ている生徒達は呆気に取られていた。

「分かるんだよ。」

「は？」

突拍子もない川森の言葉に、旭が思わず気の抜けた声を出す。

「何十年、勉強机と向き合っても手に入れないものを俺は手に入れた。今の俺ならこの世の全ての事象をく視るゝことができる。」

首を傾げる一同を他所に、旭は普段上げないような大声で川森を笑って見せた。

「川森、僕は君の好敵手として忠告したはずだ。君はく努力を怠らない自分くを崇拜し過ぎて、耐え切れないような努力ふたんを抱えた拳句に、いつか身を滅ぼすと。」

「素直であり頑固なお前じゃあ、一生俺の言っていることは理解出来ないだろうね。」

そんな二人の会話に、ようやく登校してきた慎一の言葉が水を差す。

「おかしいと思わないか？」

梶鳥が強く睨んだ（ように見えた）ので、慎一は驚いて一歩退いた。

「何でこんな騒ぎが起きているのに、誰一人教師が現れないんだ？」

パフォーマンス殺人（後書き）

次回もなるべく早目に描きます。

S t a r t o f h e l l .

慎一の発言を聞いて、初めて一同が疑問を抱き始めた。

教師が駆けつけて生徒に「教室で待機しなさい」と指示するのが、こういった不祥事の際のセオリーのはずだが、駆けつけるどころか周囲には教師など誰一人いなかった。このような非日常的な状況が更に生徒一同の不安を掻き立てる。

「テスト、テスト、本日は晴天なり。」

聞き覚えのある教師の声が、スピーカーから校舎に響き渡る。緊張の糸が解け、どんより重くなっていた周囲の空気が一気に軽くなるのを、誰もが感じていた。

しかし、一同の期待とは裏腹に、教師の声色が悪意の籠った醜悪なものに変わる。

「全校生徒諸君に連絡事項があります。」

ざわざわと、急に周囲が騒がしくなる。途端に女生徒の断末魔が響き渡った。

「ただ今より本校は教育機関としての役目を終え、あるお方が若い血肉を得る餌場となりました。」

次々に悲鳴が響き渡る。

「校内放送も意味わかんないけど、さつきから何なんだ、この悲鳴。」

梶鳥たちは周囲の様子を見て、言葉を無くした。昨日まで面倒見の良かった教師達が、氷のように冷たい表情のままで生徒達を殺し

てまわっているのだ。

——逃げるぞ——

誰かが呟いた言葉を皮切りに、生徒達が蜘蛛の子を散らすように逃げ始める。

「っはっはっは、またヘッドショット。クリティカルヒット連発だ！」

体育教師が下卑た笑い声をあげ、拳銃を乱射する。

「可能な限り生け捕りにせよ、と仰せつかっているだろうに。」

「っはは、すまんすまん。」

次の瞬間、＜生け捕り＞という言葉聞き油断した慎一に、体育教師の回し蹴りが炸裂した。

「……っえ……うおっ……。」

地面に苦しそうに蹲る教え子を踏みにじり、体育教師は高笑いをあげ続ける。

「命拾いしたな。」

「……どのみち殺されるんだろ？」

ボロ雑巾のように横たわる慎一をまじまじと見て、体育教師はただただニヤついた。

「あのお方は人間の踊り食いを好まれる。お前はこの学校で晴れて踊り食い一号ってわけだ。」

そう言った直後、ふいに体育教師の顔面に屈強な拳が炸裂する。

拳が炸裂して体勢を崩したところを見計らい、慎一が体育教師の

片足を力いっぱい持ち上げる。体育教師はそのまま頭からアスファルトに激突し、意識を失った。

「さすが、怪物女の兄貴だな。やるじゃないか。」

体育教師に鉄拳をお見舞いした梶鳥が、地面にへたり込む憤一に手を差し出す。

「俺の妹の怪力に比べれば、こんなオッサン屁でもないよ。」

「おっと、学校のアイドルの悪口はそこまでだ。……早く逃げよう。」

「

二人の会話に、古佐二が割って入った。

いつものように陽気な態度を装っているが、彼も彼なりに大分焦っていた。

「だが、どうしたものか。逃げ場がないぞ……、困るぜ、しかし。」

三人が教師から逃げ回りながら辺りを見回すと、校舎裏に続く細道で旭が手招きしていることに、古佐二が気づいた。

「旭、無事だったか。」

「話は後だ。校門は封鎖されている。死にたくなければ早くこっちに。」

旭に呼ばれて校舎裏まで行くとそこには、工具を駆使してフェンスに通り穴を空けている十人弱の男女がいた。旭のミリタリーオタク仲間なのだろう。言わずもがな、全員迷彩服を着用している。旭は細身で大人しそうな女子生徒と何やら話している。

「ここから脱出できるのか？」

古佐二が尋ねると、旭は一同の方に顔を向け静かに頷いた。

「脱出はできるし、僕は君らを逃がしてみせる。……だが、」

「だが……？」

旭は言うべきか少し悩んだふうだったが、すぐに口を開いた。

「自宅に籠るか、再び学校に戻るかの判断は各自に任せる。……前者が懸命だと思うけど。」

「わかった、どうするにしても、俺は一度家に帰る。」

梶鳥が言い終わったのを見計らい、先ほどの女子生徒が一同の前に立った。

「脱出の準備が整いました。通り穴は一度に一人通るのがやつのので、速やかにお願ひします。」

一同は彼女の言葉を聞き少し安心したが、それでも指示通りに、フェンスに出来たあまり大きくない通り穴をあくせくと通り始める。ちょうど大柄な梶鳥が通り終えた時、教師の怒号と銃声が響き渡り、一同が通った細道を監視していた男子生徒が、地面に崩れ落ちる。迷彩服の集団が緊張した面持ちで身構える。

「皆、急げ。＜美奈＞も早く通るんだ。」

先の女子生徒は、旭が掴んだ腕を振り払った。

「初めて本名で呼んでくれた。……必ず助けてみせるから、貴方もその友達も。」

「本気か、殺されるぞ……。」

珍しく平静を失っている旭に、一同は困惑する。

「私も生きてここを出る。……私が貴方の期待に答えなかったこと、あった？」

旭はフェンスの外側に無理やり押し出されても、美奈から目線を逸らさない。

「一つだけある。……一度も恋人らしく過ごすことが出来なかった。」

「それは…貴方も。」

他の迷彩服の生徒が教師達と応戦していたが、少し圧され気味になっ

てきていることに二人とも気づいていた。

「生きて会えたなら、今度はバカップルになりたいな……。」
美奈は大きな瞳に浮かべた涙を拭い、可愛らしい笑みを旭に向けて。会話はそれが最後だった。旭はフェンスの外から、去っていく美奈の背中を見つめ大粒の涙を流した。そして、まるで断末魔のような声を上げて、地面に蹲った。

「行くぞ、旭。」

梶鳥が言える精一杯の言葉だった。次に古佐二が。

「男よりも強く尊い、いい女だ。……お前がここで死んだら笑い話にも……。」

「わかってる、大丈夫だから。」

旭はまだ足元がおぼつかない様子だったが、四人は出来るだけ遠くに行くつもりで、全力疾走で学校から離れていった。四人は、走っても走っても銃声と悲鳴が聞こえ続ける、そんな気がした。

一方、学校では。

美奈を筆頭に上手く逃げ延びた数名の生徒が、別の校舎裏で打ち合わせをしていた。

「装備は改造したガスガンとスタンガン、警棒に催涙スプレーなど。」

まるで体育会系のような体格の生徒が、指折り数えて言う。その

後、美奈が咳払いをする。

「くどいようだけど、私達の仕事はあくまで脱出の補助。教師との交戦は極力避けること。いい？」

「了解。」

一同はそれぞれ別の方向へ散り、他の生徒の保護に向かった……。

S t a r t o f h e l l . (後書き)

美奈かわいいよ、美奈。

選択

—翌朝 8:00 公園に集合—

学校から脱出し一時的に帰宅した彼らは、各々の想いを抱いたまままで眠りに着いた。

そして、翌朝。昨日待ち合わせ場所に決めた公園に姿を見せたのは、意外と時間になるさい梶鳥と、何事もなかったかのような表情で口笛を吹く古佐二、スタンガンの調整を念入りにしている旭の三人だった。最後の一人が現れないまま、刻一刻と約束の時間が迫っていた。

「これ以上待つていても無意味だ。」

旭が立ち上がりそう言ったのを聞いて、梶鳥が顔を顰める。

「何かトラブルに巻き込まれてんのもかもしれないだろ？」

「……さあね。でも、少なくとも昨日の雰囲気では、わざわざ危険に身を投じに行くような気迫を、彼からは感じられなかったけれど。」

そう言い返されて梶鳥は、何か言いたいような表情で拳を握り締める。だが、それを古佐二が無表情で制する。

「旭の彼女さんはまだ危険の中に身を置いているんだぜ。だから、あせるのは仕様がな。わかってやりなよ。」

「余計なお世話だ。」

古佐二の言葉に旭が割り込む。そして、梶鳥は

「……だが……よ。……ん、わかった、先に行こう。」

梶鳥の返事を聞いて、古佐二はにやけ面を浮かべる。対照的に旭は黙々と荷造りを始めている。

「随分大人になったじゃあないの。」

古佐二が軽快な風にそう言ったのを聞き、梶鳥はまた顔を顰める。
「あいつは…慎一は来るよ。すぐには無理かもしれないが、いつか必ずな。」

「言い切るねえ。＜慎一とは＞そんなに仲良しじゃあないのに。」

古佐二が意味深な発言に、梶鳥は今日一番の顰め面で古佐二の足を軽く蹴飛ばした。

「遊んでないで行こう。君の意中の人も未だ学校にいらんだろう？」

旭の一言で梶鳥の顔が一気に真っ赤に変わる。

「ハハ、俺が言った時と違って照れ隠しできないからね。」

「うるせえつ。…困るぜ、しかし。」

選択（後書き）

遅くなつてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3587v/>

捕食学校 School for preying

2011年10月6日06時23分発行